

## 飯島賢二の 『恐縮ですが...一言コラム』

### 第 386 回 「そしてエースがいなくなった」 ~セ・リーグ

2010.10.10

セ・パ両リーグともペナント優勝が決まり、いよいよクライマックスシリーズ突入である。

今年は特に、プロ野球が面白い。

今回はプロ野球の、「だからなんだ」という屁理屈(へりくつ)論である。

「なぜセ・リーグはエースが育たないのか？」(スポルティーバ 9月13日配信)、こんなニュースが目についた。今シーズン、ここまでの両リーグの完投数を比較しても、

パ・リーグが81なのに対し、セ・リーグは37と半分にも満たない。(9月17日現在)

(<http://zasshi.news.yahoo.co.jp/article?a=20100913-00000305-sportiva-base>)

確かに、パ・リーグには指名打者制があり、単純比較は、セ・リーグピッチャーが可哀想だ。

セ・リーグは、どうしても、イニング数、完投数でパ・リーグを下回るのは仕方のないことかもしれないが...、それにしても、その差があまりにも大き過ぎる。

一体、この数字は何を意味するのだろうか。

昔のピッチャーは、「先発したら完投」という意識があり、それがひとつのプライドであった。

しかし、投手の分業制が進み、早い回で先発投手を交代させるケースが増え、特に最近のセ・リーグではその傾向が顕著になっている。

先発投手を続投させるよりも、継投でしのぐ方が、リスクが少ないという考え方だろう。

「つまり、負けられない野球をしているような印象を受けますね」そう語るのは、横浜の監督を務めたことのある牛島和彦氏である。

かつてセ・リーグにも黒田博樹、上原浩治、川上憲伸など、エースたちがしのぎを削りあう時代があった。だが、彼らが次々とメジャーへ移籍してから、エースと呼べる投手がいなくなったのも事実だ。セ・リーグの投手は 04 年の川上憲伸を最後に、投手の最高栄誉である「沢村賞」をパ・リーグの投手たちに奪われている。

そのパ・リーグ「沢村賞」投手にしても、05 杉内(ソフトバンク)18勝4敗、06 斉藤(ソフトバンク)18勝5敗、07ダルビッシュ(日ハム)15勝5敗、08 岩隈(楽天)21勝4敗、09 涌井(西武)16勝6敗という状況で、5人の平均防御率は1.97であり、かつてのエースたちが記録した実績には、到底及ばない。

ちなみに、かつての最多勝記録を見ると、セ・リーグは

1、39勝 真田 重蔵 (松竹1950) ~ 何と私が生まれる前の年

2 35勝 権藤 博 (中日1961) ~ 私が小学5年生

3 33勝 別所 毅彦 (巨人1952) ~ 私が生まれた翌年

パ・リーグでは、何としても「神様・稲尾様」

1 42勝 稲尾 和久 (西鉄1961)

2 38勝 杉浦 忠 (南海1959)

3 35勝 稲尾 和久 (西鉄1958)

防御率は、セ・リーグで第1位 0.98 村山実(阪神1970)、パ・リーグは 1.06 稲尾和久(西鉄1956)である。

今の主力ピッチャーの倍以上の勝数をあげ、それでいて打たれていない。ガッツとプライドと、強靭な体力は、今と比べようもない実績が、見事に物語っている。

これこそが「エース」と呼べる、圧倒的存在だったに違いない。

「エース」同士の真剣勝負、これがプロ野球の醍醐味だ！とぶつぶつ言っているおじさん、

それでも枝豆つまみ、ビール飲みながら、今日も平和で何よりである。